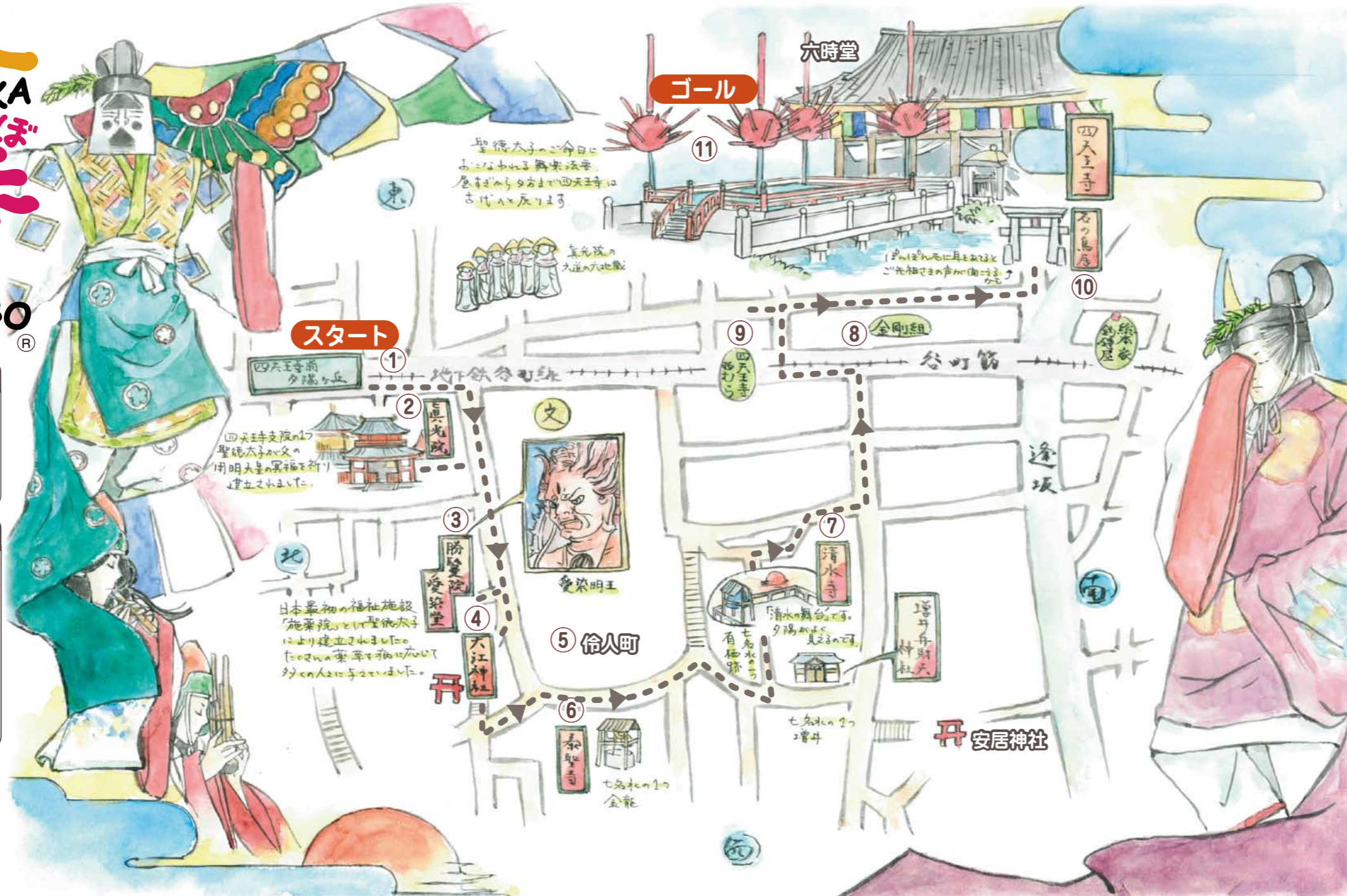


大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

# 現代にも生き続ける太子信仰

～愛染さんから四天王寺へ～

四天王寺施薬院跡の愛染さんから、現存する世界最古の企業・金剛組、能「弱法師」に登場する石の鳥居、聖霊会舞楽大法要が行われる石舞台まで、1400年以上の歴史を誇る日本最初の官寺・四天王寺界隈を巡ります。現代にも生き続ける太子信仰の息吹を感じとってください。



## ① 四天王寺前夕陽ヶ丘駅

昭和43年(1968)に四天王寺前駅として開業。平成9年(1997)に現駅名に改称しました。地名は歌人・藤原家隆の歌「契りあれば難波の里に宿り来て波の入り日を拝みつるかな」が由来といわれています。

## ② 眞光院(光徳山瑞雲寺)

四天王寺支院。聖徳太子が父・用明天皇の冥福を祈るために、念仏三昧を修したところ、紫雲に乗って西方教生無量寿仏が現れたので、太子自作の阿彌陀如来像を安置したのが起こりとされています。境内には六地藏や六万體地藏が奉安されていますが、眞光院の界隈には「その昔、聖徳太子が六万體もの地藏を作って置かれた」という伝承があり「六万體町」と言う地名も残っています。

## ③ 愛染堂(勝鬘院)

四天王寺別院。寺伝では聖徳太子が開いた施薬院に始まり、古代インドのコーサラ国の王娘・シュリーマラーが登場する経典・勝鬘経を太子が講じたので勝鬘院とも呼ばれます。施薬院は薬草を栽培して怪我や病気で苦しむ人を救うための施設で、我が国の社会福祉事業の発祥地ともいわれます。本尊は愛染明王で、全身燃えるような赤色で、忿怒の形相ですが、これは悪者を追い返すため、煩惱(欲望)を菩提心(悟り)に導いてくれる仏様です。「愛に染める」という言葉から、恋愛、良縁、夫婦円満に御利益があるとして女性の信仰が篤いことでも知られています。直木賞作家・川口松太郎が付近に住んでいたことがあり、代表作「愛染かつら」のモデルの霊木があります。また6月晦日からはじまる愛染まつりは、大阪のその年の夏祭りのはじめで、愛染娘の宝篋龍行列の掛け声は「21世紀に残したい大阪の音風景」に選定されています。

## ④ 大江神社

聖徳太子が四天王寺を創建した際に、その守護として造営した神社と伝えられています。河堀稻生神社、堀越神社、久保神社、小儀神社、土塔神社、上之宮神社と共に「四天王寺七宮」とも呼ばれます。四天王寺から見て位置が乾(北西)の方角にあることから江戸期には乾社とも呼ばれました。また毘沙門堂とも呼ばれましたが、毘沙門天は、寅年寅月寅日寅刻に現出する信仰から、境内には珍しい狛虎が奉納されています。

## ⑤ 伶人(れいにん)町

「伶人」とは楽師のことで、四天王寺の楽師たちが集住していたことが地名の由来です。「徒然草」には「当寺の楽は、よく図を調べ合はせて、ものの音のめでたく調り侍る事、外よりもすぐれたり。故は、太子の御時の図、今に侍るを博士とす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。その声、黄鐘調の最中なり」(四天王寺の音楽はハーモニーが美しく他よりも優れています。それは太子の時代の音律の教えが今に伝わっているからで、六時堂前の鐘の音色を基準にしています)という伶人の言葉が記録され、作者・吉田兼好も「何事も、辺土は賤しく、かたくななれども、天王寺の舞楽のみ都に恥ぢず」(都から離れた辺鄙な場所に行くと思苦しいものだけど天王寺の舞楽は都に勝るとも劣らない)と絶賛しています。

## ⑥ 泰聖寺

眼病に効く霊水で有名な柳谷観音の大坂別院。かつて茶の湯にも賞味されたという名水・金龍水があります。洗眼すると眼病に効くと伝えられ、白内障で失明危機に陥った天才棋士・坂田三吉の妻ココウがお百度参りをしました。手術は成功しましたが荒行によってココウは病に伏せ、不帰の人となります。晩年、三吉は「わいが生きてるのはココウとヤナギだんのおかげや」といった言葉を残しています。

## ⑦ 清水寺

有栖山清光院清水寺といって四天王寺支院です。創建は不詳で、もとは有栖寺(うすじ)と呼ばれていましたが、寛永17年(1640)に延海大阿闍梨が京都・清水寺を模して中興しました。京都・清水寺より譲り受けた十一面千手観世音菩薩を本尊としています。「清水の舞台」もあって、往時は大坂の街や大阪湾を見渡す眺望の地として多くの参拝者が訪れました。また音羽の滝そっくりな大阪市内唯一の天然の滝「玉出の滝」もあります。この滝は四天王寺金堂下の青龍池とつながる霊水とされていて、時折、滝に打たれて修行する行者を見ることができます。

## ⑧ 金剛組

敏達7年(578)に四天王寺建立のために聖徳太子が百濟より招いた3人の宮大工のうちの1人・金剛重光によって創業。推古15年(607)には我が国が誇る木造建築の最高峰・法隆寺を築き、1400年以上の歴史を誇る、現存する世界最古の企業です。四天王寺は戦火や天災などで7度焼失しましたが、再建のさいの正大工職は歴代の金剛組が務めました。四天王寺の毎年1月11日に行われる大工職人の仕事始めの儀式「手斧(チョンナ)はじめ」(一般非公開)でも、いまもなお金剛家代々の当主が務めています。

## ⑨ 四天王寺石舞台(聖霊会舞楽大法要の舞台)

住吉大社の石舞台、厳島神社の平舞台と並ぶ「日本三舞台」の1つで国の重要文化財です。毎年4月22日(太子のご命日・本来は旧暦2月22日)に、この石舞台で行われるのが聖霊会舞楽大法要で、太子の御聖霊を慰めるために行われます。インド・中国からの音楽様式に基づく左舞や、朝鮮半島やシベリア系の右舞とがあり、太子目覚めの供養舞「蘇利古」(そりこ)や、極楽鳥を模した童舞「迦陵頻」(かりょうびん)、胡国の蝶をモチーフにした童舞「胡蝶」(こちょう)といった舞楽が、色鮮やかな装束を身にまとった楽人たち(天王寺楽所雅亮会)によって奉納されます。千数百年の歴史を誇る古式ゆかしい伝統芸能として、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

## ⑩ 四天王寺石の鳥居

国の重要文化財。永仁2年(1294)に造られた日本最古の石造の大鳥居で、吉野の銅の鳥居、宮島の木の鳥居と並び日本三鳥居の1つ。春・秋の彼岸には石鳥居の中に夕陽が重なるように設計されていて、中日には夕陽を拝んで西方極楽浄土を観想する「日想観(じっそうかん)」が執り行われます。扁額には「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」とありますが、かつての四天王寺の西には海が広がり、石鳥居は「お釈迦さまが説法する極楽土へつながる東門」として庶民の信仰を集めました。四天王寺を舞台にした能「弱法師」でも「仏法最初の天王寺の石の鳥居ここなれや。立ち寄りて拝まいざ立ち寄りて拝まん」と謡われて登場します。

## ⑪ 浪花漬 四天王寺西むら

四天王寺参詣道にある天王寺蕪、田辺大根、守口大根、大阪しろな、泉水水なす、毛馬胡瓜などの「なにわ伝統野菜」の漬物屋です。それぞれの伝統野菜の特長を生かして、昆布や塩にこだわって薄味に仕上がっています。どこか懐かしい味と評判で、全国からリピーターが訪れます。なにわ伝統野菜の中には聖徳太子が観福寺(南河内郡太子町)を造営するさいに、法隆寺から持ち帰った里芋が発祥という石川早生(いしかわわせ)もあります。

【注意事項】この地図は「大阪あそ歩」のまち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内) 「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。http://www.osaka-asobo.jp または「大阪あそ歩」でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2~3km、2~3時間程度を基準として作成されています。